

思い、挑戦を続ける

活躍する卒業生

今まで歩んできたさまざまな環境の下、
そんな熱き思いを次の世代に伝えるために。
培ってきた知識や経験を糧として、今も挑戦を続ける先輩たち。

故郷再生の思いが結実した 「千の風」手紙プロジェクト

西条の魅力を 全国に発信したい

「千の風になって」のまちづくり実行委員会 実行委員長

越智 將文

OCHI Masafumi



愛媛県西条市出身のテノール歌手秋川雅史さんのヒット曲「千の風になって」にちなんだまちづくりとして、同市では市民主体の「千の風」手紙プロジェクトが進められています。市民グループの代表を務めているのが越智将文さん。市街中心部の商店街で家業の洋品店を営む傍ら、故郷を活性化させるために一役を担おうと、プロジェクトの舵取り役に尽力しています。

生きる勇気を発信する 手紙プロジェクト

「千の風」手紙プロジェクトは、亡くなった大切な人に贈る手紙を全国から募るもので、西条市が事業を継承して、今年が2回目。市と市民グループが主催しています。2013年2月～5月に募集があり、国内外から1340通が寄せられました。11月下旬をめどに、公募で選ばれた市民が応募作品の中から優秀作品を選び、表彰することを予定しています。

「手紙プロジェクトは、手紙に込められた生きる勇気を西条から発信することを目的としています。故郷を魅力あるまちにしたいという思いが手紙募集事業にたどり着くまで、私たちの手でできることを探ろうと地道に活動を続けてきました」と越智さんは話します。

中学生のころからバンド少年だった越智さんは、大阪工大時代は軽音楽部に所属。カントリー&ウエスタンを歌うバンドのボーカルとして活躍し、プロデビューの誘いかかったこともあるほど実力です。華やか

な芸能界の仕事にもあこがれましたが、家業を継ぐため、卒業後は西条に帰郷。洋品店を営みながら地元でバンド活動を続けていました。

家業の傍ら、市街中心部であっても空き店舗が増える商店街に活気を取り戻そうと、若手の経営者仲間で活動。活性化対策部会長を務めるなどリーダーシップを發揮していました。しかし、全国的な傾向でもみられるように、小さな商店街では大型の商業施設に太刀打ちできず、疲弊するばかりです。どうすれば、人が集まってくれるのかと思案する日々でした。そんな2006年の大みそか。紅白歌合戦で秋川雅史さんが歌う「千の風になって」を聴き、素晴らしい歌声に鳥肌が立つほどの感動と衝撃を受けたといいます。秋川さんは、地元西条市出身のテノール歌手。この心に残る歌を通じて、地域おこしができないかと考えるようになったそうです。それも商店街という狭い範囲ではなく、西条全体が元気になるためのまちづくりです。越智さんが発起人となって呼び掛け、翌年夏に商店街の有志と商工会議所、同市による「千の風になって」のまちづくり実行委員会を発足。官民一体となった地域おこしがスタートしました。

共感とともに 町おこしをけん引

コーラス活動が盛んな土地柄もあり、最初のころは歌で1つになろうと、「千の風」の心を伝える市民音楽祭や朗読会などを開催。好評を得ましたが、イベントだけでは一過性のもので終わってしまいます。実行委員会を引っ張る越智さんが常に考えていたのは、「末長い地域おこしで市民の関心を高め、西条を魅力あるまちにするためには何をすべきか」ということ。心の中で生きる大切な人を思う気持ちから、人の心の再

おち・まさみ

76年3月大阪工大工学部経営工学科卒。同年4月愛媛県西条市で家業の婦人服店を継ぐ。07年8月に「千の風になって」のまちづくり実行委員会を発足させ、実行委員長を務める。同市の手紙募集事業をサポートするため、13年1月に市内11団体による「千の風」手紙プロジェクトを設立し、その代表も兼任。愛媛県出身。59歳。

生を願う「千の風」手紙募集事業をまちづくりの根幹に据えるというプランは、この思いにぴったり合致するものでした。初回で募集された手紙原書の寄託を受け、市立西条図書館を保管先に。今度は自分たちで行う第2回の募集に向けて、2013年1月に手紙プロジェクトをサポートする市民グループを立ち上げ、地元の社会福祉協議会や文化協会、NPO法人など11団体が参画。多くの賛同者も集い、まち全体の気運が高まっています。

曲の訳詞・作曲者である新井満さんの協力を得られたことから、同様にまちづくりに取り組む他の地域との連携も生まれています。「千の風」誕生の地である北海道七飯町と、新井さんの故郷である新潟市との交流が始まったのです。2009年から3市町連携による「千の風サミット」を開催し、全国への共同情報発信を目的として積極的に意見交換。西条市民からの寄付金で製作した手紙プロジェクトの投函用ポスト「白い羽のポスト」も七飯町と新潟市に寄贈し、3市町協力で取り組むようになりました。

地域活性化の ネットワークを広げたい

市民主体のプロジェクトでは何よりも人が財産。一人ひとりは小さな力であっても、協力し合うことで大きなパワーが生まれます。「実行委員長として周りの人たちの意見を聞くことを心掛け、1人でも多くの人が参画しやすい雰囲気づくりに心をくだいてきました。コミュニケーション力は一朝一夕で身につくものではありませんが、大阪工大の軽音楽部が礼儀やマナーにも厳しいところでしたから、学生時代に人との接し方を学ぶことができて良かったと思います」と越

智さん。中には他府県在住にもかかわらず、毎回イベント時には西条に戻って手伝ってくれるメンバーもいるそうです。

「手紙プロジェクトを発端に関連グッズの制作や物産交流など、さまざまな情報を発信して西条の名を日本中に広めたいですね。西条にはおいしい天然水やだんじり祭り、そして西日本の最高峰・霊峰である石鎚山など自慢できるものがたくさんありますし、四国霊場88カ所の札所も多く、いわば聖地です。しかし、残念ながら県外での知名度は今ひとつ。天国へ手紙を届けるプロジェクトとリンクさせて、祈りの聖地をテーマとするまちづくり計画の案も出ています。西条の取り組みを知ってもらうことで、地元活性化を図りたいと考えている他地域の人たちにも共感者を増やし、日本中にネットワークを広げていく。東日本大震災被災地の岩手県陸前高田市で新井さんの詩集をモチーフとしたアニメーション映画の制作が進められていることから、新たな協力関係も生まれようとしています。

「バンド活動に明け暮れていた学生時代は、ミュージシャンとして音楽で身を立てていきたいと考えていました。その夢は断念したけれど、故郷で新たなやりがいを見つけた今、プロジェクトに全力を注ぎ、西条に大輪の花を咲かせたいという思いです。裏方として力を尽くすだけでなく、「千の風」関連イベントに出演者の1人として、ステージライフも満喫していますよ」

人生でそのときどきに出会う人との関係を大切にしていれば、思いもよらないチャンスが生まれ、1人ではできないことでも成し遂げられる可能性が広がっていく。故郷の再生に情熱を注ぐ越智さんの視線は常に前を向いています。

